



〈 社会人の窓 12 〉

淀川に学んだ半世紀

河合 典彦

淀川に魚を求めて足繁く通い始めて 51 年が過ぎました。船頭の見事な櫓裁きで対岸に人や自転車を運んだ渡し舟の微かな記憶からは 60 年を超えています。大阪市内の水環境の無い町に生まれ育った私にとって、魚捕りに呆けることのできる淀川はまさに異空間でした。自宅からバスを乗り継ぎ、1 時間以上をかけて通った城北ワンド群（大阪市旭区）や赤川の砂州タマリ（大阪市都島区）は、種類といい、量といい、まさに淡水魚の宝庫でした。大きな外来種問題が続いているブルーギルやオオクチバスなどいかなかった時代です。採集した魚の一部は自宅に持ち帰り、飼育に勤しんだものです。現在国際的にもその希少性が認められたアユモドキも、自宅で人工増殖させていました。そして、「淀川の傍に住みたい」という当時からの宿願は、1983 年の結婚を機会に成就し現在に至ります。今や自宅から自転車で 10 分足らずの淀川の水環境を代表する城北ワンド群は、先達の保全運動と河川管理者の理解によって当時の姿がほぼ残されたものです。

ところが、居住を始めて 2, 3 年経った頃、“異変”に気づきます。まとまった降雨があっても、河原が大きく冠水することはほとんど無くなりました。水の濁ったワンドが多くなり、きれいな砂質の水底が泥っぽくなりました。水に浸かった水制工の石の表面も付着物で汚れました。そして何よりも、以前は普通にみられた魚種のうち、何種もがまったく姿を見せなくなり、魚の数そのものも減ってしまいました。淀川のシンボル・フィッシュとも呼ばれるイタセンパラは、幸いにも環境に対する適応幅を有していたことから、大きく減少したものの絶滅を免れましたが、適応幅が狭かったと思われるアユモドキやイチモンジタナゴ、ツチフキ、そして数多く見られたヨドコガタスジシマドジョウ（淀川の固有亜種）は完全に姿を消しました。しかし、原因はよく解りません。それが解明されるきっかけは、1997（平成 9）年の河川法改正によって「河川環境の整備と保全」が目的化されたことです。この改正を受け、淀川を管理する建設省淀川工事事務所（当時）が助言機関として「淀川環境委員会」を設置しました。私も微力ながら、豊かな生物多様性を誇った時代の淀川の体験者として、発足当初から委員を仰せつかっています。当初は、河川工学と生態学、双方の専門家の河川環境に対する認識の隔たりを強く感じましたが、会議や勉強会を重ねるうちに、それがしだいに小さくなっていきました。

共通認識を得たワンドの環境劣化の原因は、一言で表すならば“洪水攪乱”の喪失です。30 年ほど前まで、ワンドの保全は構造を残すことで目標が達成できると考えられていました。淀川最大の城北ワンド群も、それに次ぐ規模の庭窪ワンド群（大阪府守口市）もそのように考えて保全され、関係者は安堵してきたのです。ところが、それだけでは十分ではありませんでした。ワンドの構造をコンピュータのハードウェアに例えると、水位変動にともなう洪水攪乱は、ソフトウェアに例えられるでしょうか。双方がうまく機能することでコンピュータが性能を発揮するように、洪水攪乱は、ワンドの豊かな環境が創出され、維持されるのに不可欠かつ極めて重要な要素だったのです。多様な規模と頻度で生起する洪水攪乱は、ワンドのような水域のみならず、陸域も含めた河川生態系の健全性に大きく関わっています。これこそが、私が半世紀にわたる淀川との関わりの中で現場から学んだ最大の教訓に他なりません。とりわけ、淀川中下流域に著しい“洪水攪乱”の喪失は、淀川の治水安全度を向上させるために行われた河川整備がもたらした結果です。しかし、治水対策の必要性和重要性は、特に昨今の頻発する洪水災害をみると、論を俟たないでしょう。自然豊かな淀川と治水安全度、この背反する事象の両立をいかに図っていくか、模索の日々が続きます。

（大阪市立新豊崎中学校 再任用理科教諭）

イベント報告

日本水防災普及センターが NPO 法人に認証

昨年末に発足した日本水防災普及センターが、本年9月23日に京都府からNPO 法人の認証を受けて法務局に登録申請し、10月2日に登記完了しました。早速、10月18日に淀川河川敷フェスティバル、11月22日に茨田イチョウまつりでの堤防決壊模型実験公開、10月22日に第1回、12月16日に第2回の水防災普及セミナーを開催するほか、各地で講演を行うなど、法人としての活動を開始しています。皆様の一層のご支援をお願いいたします。(S・K)



堤防決壊模型実験の様子

天若湖アートプロジェクト 2020

10月24日（土）に、天若湖アートプロジェクト2020が開催されました。今年度は新型コロナウイルス感染拡大を受け、例年であれば6月に開催されるところを10月に延期し、地域住民の方々に不安を与えないために初めてオンラインでの開催となりました。

初めてのオンライン開催ということもあり手探り状態での運営となりましたが、現地からの中継は非常に好評だったことに加え、地元の新聞にも取り上げていただきました。このイベントを途切れさせることなく継続することができ、心から嬉しく思います。(N・K)



新聞記事

(京都新聞 10/25 掲載)

第10回 川の恵みを活かすフォーラム ～川の恵みを活かした日本の河川文化に学ぶ～

10月25日(日)に、キャンパスプラザ京都で京の川の恵みを活かす会が主催する「第10回川の恵みを活かすフォーラム」が開催されました。主にアユ、サツキマス、サクラマスについての近況報告や河口付近のアユの動きをテーマに話し合いました。私もアユの研究で発表しました。大勢の人前で発表することが初めてだったので緊張しましたが、私の研究内容を温かく聞いてもらいました。また、発表内容をアドバイスくださった先生方やゼミ生の皆さんに感謝しております。

11月7日(土)には、食育キッチン石黒で食味会を行いました。鮎のかりんとうやニゴイのすり身を使ったお菓子などもあり美味しくいただきました。魚や自然の大切さを知ることができました。(T・K)



京都府立大学東昇先生による講演

琵琶湖・淀川・大阪湾流域圏シンポジウム in 大阪 兼 第22回 近畿水環境交流会

11月21日(土)に大阪工業大学梅田キャンパスにて、琵琶湖・淀川・大阪湾流域圏シンポジウムin大阪兼第22回近畿水環境交流会が開催されました(参加者は86名)。12時半からポスターセッションで、13団体・個人が発表を行いました。13時半から近畿地方整備局河川部長の豊口佳之氏より治水行政に関する最近の動向、愛知大学地域政策学部准教授の飯塚公藤氏より琵琶湖・淀川・大阪湾流域圏における近代舟運の変遷についてご講演いただきました。国土交通省が7月6日に河川の流域のあらゆる関係者が協働して流域全体で行う治水対策、「流域治水」への転換も含めた内容でした。

その後、近代舟運の歴史や今後の活用方法など、多様な観点からの講演で
した。加えて、総合討論では鋭い質問や意見があり白熱した討論会となりました。(M・Y)



会場風景

第13回 茨田イチョウまつり

11月22日(日)茨田樋遺跡水辺公園にて第13回茨田イチョウまつりが開催されました。このイベントは毎年11月に開催されていますが、今回は新型コロナウイルスの影響で人と人が距離を取りながらのイベントとなりました。その影響の中イベントには94名の参加者が集まり、地域住民や子供たちにどんぐり工作、点野玉づくり、芝人形づくりなどのクラフトコーナーや、かるたや紙芝居を用いた防災体験を発信することができました。Eボート体験も乗員を削減しながらの運航となりましたが、多くの子供たちに体験していただきました。(W・K)



大阪府による防災紙芝居

4 群目の中聖牛の設置と竹蛇籠の再設置

12月5日(土)、6日(日)にやましろ里山の会と京都大学が主催する、木津川の中聖牛の設置と増水により壊れてしまった竹蛇籠の再設置に参加してきました。この活動は、伝統的河川工法である聖牛を用いた河床地形管理を目的に行われています。今回は、当日までにやましろ里山の会の皆様が聖牛の木枠を設置してくださっていたので、竹蛇籠に石を詰める作業のみとなっていました。しかし、石を詰める作業が最も人数と力がいる作業であったので、私たち学生の力があつたことが助かったと喜んでいただきました。完成した中聖牛を見て達成感を得ることもできたので、両日ともに参加できたことがとても嬉しく思います。(O・T)



今回設置した中聖牛

今後のイベント案内

淀川愛好会 総会 2021

日時: 2021年2月27日(土) 11時~12時

場所: 摂南大学寝屋川キャンパス 12号館3階 1232教室

第5回 近畿河川フォーラム 兼 第23回 淀川討論会

日時: 2021年2月27日(土) 14時~17時

場所: 摂南大学寝屋川キャンパス 12号館3階 1232教室

オンラインでの参加も可

プログラム: 14:00~ 開会あいさつ

14:05~ 河川協力団体全国協議会および近畿の動き

14:30~ 講演 「水害ソフト対策について(仮)」
京都大学防災研究所教授 矢守克也氏

15:30~ 休憩

15:40~ 各参加団体の活動紹介

主催: 近畿水環境交流会・河川フォーラム実行委員会

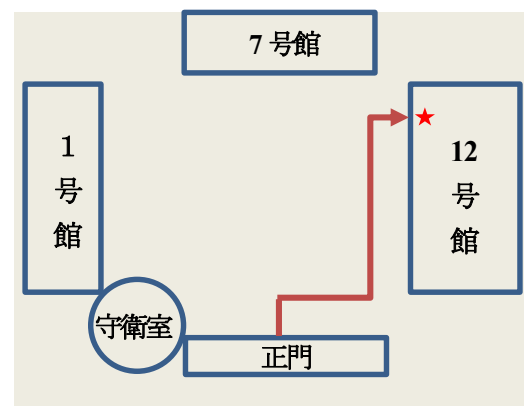
参加費: 無料

申し込み先: 淀川愛好会事務局 〒572-8508 寝屋川市池田中町17-8 摂南大学理工学部都市環境工学科 石田研究室内
TEL/FAX: 072-839-9125

***参加者は参加方法(オンライン or 会場)をお伝えください。**

発表される団体は、申し込みの際に発表者名、希望の発表時間、テーマをお伝えください。

申し込み締め切り: 2021年2月20日(土)



ゼミ活動を通して

玉川 敬一郎

私は、生態環境学研究室に所属しています。選んだ理由としましては、生態調査に興味があったからです。私の卒業研究も「芥川におけるアユの遡上調査と仔魚調査」のテーマで研究に没頭しています。ゼミでは、河川関係のフォーラムなどのイベント行事に多く参加しました。私もアユのフォーラムに参加し、大勢の人の前で自分の研究を発表した時はとても緊張しましたが、自信をもって発表できました。さらに琵琶湖・淀川・大阪湾流域圏シンポジウムでは、自分たちの研究内容をポスターにし、ゼミのみんなで協力し運営スタッフとして冊子の作成から会場設営、片付けまで行いました。また、河川関係の方々と触れ合うこともでき、事前の会議にも参加して良い経験になりました。そして河川環境や自然の重要性を知る良い機会にもなりました。私が研究している内容にも関連しているので、今後の研究に活かしていきたいと思っています。

来年、私は鉄道ゼネコンに就職します。ゼミに所属する前までは直接の繋がりは感じませんでしたが、現場に行き自然と触れることや、様々な人の協力無しでは成り立たないといったところは共通していると思います。残り少ない学生生活も悔いが残らないようにしていきたいです。

(摂南大学理工学部都市環境工学科4回生・就職先：広成建設株式会社)

お悔み

本会の立ち上げ時から大変お世話になった、元学園厚生会職員 田中美津江さまが、今年3月にお亡くなりになりました。11号館11階のルーエ第6会議室で、本会の打ち合わせ会やパーティのお世話をいただいたのをはじめ、学外のイベントにもたびたび参加いただき、学生たちを含む多くの会員にお励ましをいただきました。改めて深く感謝申し上げるとともに、謹んで哀悼の意をささげたいと存じます。今後とも天国から私たちの活動をお見守り下さい。 合掌

(淀川愛好会 相談役 澤井健二)

編集後記

今号のヨドリックニュース〈社会人の窓〉に河合典彦先生が執筆してくださった「淀川に学んだ半世紀」に、興味と心を奪われました。

過去の日本人は、川と自然との関係において「山川草木悉皆成仏」という自然観をもっていました。すなわち、集落の暮らしの中に長年時間をかけてつくりあげてきた「自然と共に生きる思想」の自然観は、地域社会の都市化と共に失われてしまいました。

1997(平成9)年に「河川法」が変わるまでは、治水と利水を中心に進められた河川整備が、この法改正を機に、川における自然環境に配慮しなければならないことになりました。木津川の中聖牛や竹蛇籠の設置も、環境に配慮した整備の一つです。

ところで、コロナで始まりコロナで終わる2020年が終わろうとしています。今年も、地球温暖化による異常気象が地域社会に与えた影響は、計り知れない大きな社会問題となりました。石田ゼミとエコシビル部の学生諸君には、コロナ禍における研究や勉学の合間を縫って様々なイベントに積極的に参加していただき、さらに誌面を卒なく賑わしていただいたことに深く感謝いたします。

編集長 岡崎善久 (岡崎善久建築設計事務所)

淀川愛好会事務局：〒572-8508 寝屋川市池田中町17-8 摂南大学理工学部都市環境工学科 石田研究室内

TEL/FAX：072-839-9125

HP： <http://www.setsunan.ac.jp/civ/yodoric>

E-mail： ishida@civ.setsunan.ac.jp
